

第5章 アグロフォレストリーの普及

アグロフォレストリー・システムは大規模な企業造林に比べると村落と地域を対象とした小規模なことが多い。したがって、情報の交換や技術指導が十分に行なわれる必要がある。またアグロフォレストリーは農業と林業の両分野の知識を持合せている人がもっとも好ましいが、普及には文化的活動、技術、社会経済などの知識を越えて、地方住民の生活水準を改善し、一般に利益を享受しつつ地方の発展に貢献できなければ意味がないので、この点の配慮ができる人が好ましい。

(1) 普及の準備

もともと普及活動を行なうには地域の特徴を知るためのデータやどのようなシステムを選択するのかの議論が必要となる。もちろん問題点や目標については常に農民との対話を基礎に置くことが肝要で、これらを前提にして以下のことを心掛けねはならない。

- i) 農民への普及を図る際、伝統的なアグロフォレストリー・システムの知識をどの程度普及員が持っているかを事前にしておくこと。
- ii) 新しい実践方式を採用するための目的を普及員が十分理解しているかどうか検討する。
- iii) 農民が必要とすることや関心を満たすための普及と実践の動機があるかを確認する。
- iv) 農民と一緒に作業しながら現場で指導する気があるか。またそれができるか。
- v) 普及がうまく軌道に乗るための場所(農場)やすでに特徴づけの明らかな地域があるか下調べしておく。
- vi) 普及のサービスを享受できる人がいるかどうか。例えばアグロフォレストリー・システムの試行に関心を持っているかどうか。

vii) 生活や土地生産性の改良の必要性があるかどうか。

viii) 使用可能な土地、時間、労働力があるかどうか。

なお、普及には経済的で効果のある、持続的な生産システムの採用に重点を置き、過大な目標は避け、準備には現実的で実行可能な計画と人数や場所を大きくとらずに余裕のある指導をとることも必要である。

(2) 普及に必要な組織網と選択

アクロフォレストリーの普及を行なうには種々の政府機関、プロジェクト、共同体、地域グループなどを利用することができる。その例として、①研究機関を用いた政府プログラム、②共同組合による組織、③共同体のグループやリーダー、④共同体のサービスクラブ、社会グループ、⑤各種学校と教師、⑥農業組合、⑦企業と市場、⑧金融機関などがある。そして対話を通してこれらの組織網に取り込むのである。例えば農業協同組合について考えると、組合は組合員に生産物を分配して彼らの活動を多様化するためアクロフォレストリーの実践方式の利用に深い関心を持っている。また天然資源機関ではアクロフォレストリー・システムの



写真 2 3 農家の苗畑と苗木の保育を指導する普及員

(ムエンベ、タンザニア)

利用によって土壌と他の資源の維持ができるからである。しかし逆に普及の妨げになる機関としては、土地や財産所有に関係しているところがある。もし農民が長期的な利益を受けられないとすればアグロフォレストリーの実践を好ましいと思わないからである。

組織網の選択にはまず、ある事務所を訪問し、メンバーの関心事や活動調査を行ない、ついでアグロフォレストリーについて説明した後、普及の目的が何処にあるかを教える。地方共同体を参加させるには農民との直接的な接触も必要であり、苗木養成のための苗畑も確保する。機関としては信用のある政府系の組織の方が安全である。

(3) 普及戦略と活動

普及員には農業はもとより林業と畜産や社会開発に関心があり、しかも技術を学ぶ意欲を持っている人が必要である。なかでも樹木の植栽方法や種に興味があることは応用性がきくので指導上適任といえる。

小規模の試行では、ある農家をまず直接訪問し、活動の対象を絞っておくと効果的である。保守的な農村ではパイオニアの様子を常に伺っているのが実情だけに、先行者の選択には注意を払うことになる。途上国の多くではこれまで造林を個人が積極的に行なっていないので、この種の会議や討論を多くとることも戦略上大切である。また一地方や地方共同体の参加では土地を所有する農民だけでなく、労働者なかでも子供や女性を加えることを忘れてはならない。例外的な場所では宗教もからむところがある。

なお普及活動で大切なことは農作物の栽培期間は出入りが多いが、永続的システムでは庇陰樹のみが残される期間に普及活動の停止することが時折ある。これは次の農作物栽培のステップに過ぎないので、この期間こそ十分な対話が必要になる。

(4) 対話の形態

対話には情報移転の方法としての役割があるだけに普及する者の立場としては優勢的であってはならない。たとえばシステムの実践に際して採用方法を強要するといったことなく、対等の立場で農民に尊敬と友情を示し、彼らと作業を一緒にすることである。外国の役人は往々にして、立場上自ら現場で働くことを行わないため、日本の技術者が土に触れ、泥に汚れることを嫌ったり、軽蔑したりすることがあるが、技術移転や普及にはこれを欠かしてはならない。むしろ、農民はこうした姿に心ふれるものを感じるので、ぜひ実行すべきことである。つぎに対話する際にはできるだけ平易な言葉を使い、科学用語や専門語は避ける。打合せや約束事は時間を厳守し、訪問前に連絡をとることも大切である。

最初に述べたようにアグロフォレストリーは失敗することもありうるので実践した際の利益を誇張しないことが鉄則である。このほか地域の文化、習慣も知っておくことが必要であるから、むしろ普及員は地元出身の方が適しているとすら言われるほどである。



写真 2 4 普及員への技術研修も欠かすことは出来ない

(トウリアルバ、コスタリカ)

(5) 普及活動

有効な普及活動を行なうためには個人または共同所有の農地または農場を直接訪問することや苗畑、見本林、展示園などを設置することも有意義である。

直接、農民や農場へ出向いて意識、情報、教育、指導を行なうにあたっては、仕事に熱心な人から訪問する。この場合、固定概念やシステムを与えるよりは暗示またはヒントを与えて論じ合う方が農民自身の問題として立上りがよくなる。そして新しいシステムを企画するときは巾広い情報を与えておいて、そこに疑問を残さないようにする。論じ合った後は全てを整理してマニュアルを作って渡すとともに控を作って持っておく。実際に行動を始めた時は必要な道具の利用を保証してやらねばならないが、農民はアグロフォレストリーの実行に必要な程度の道具は持っているものである。記録上の書類には投資、収入額や量、設計上の問題点などを収集しておけば評価する際に役立つことができる。

農民がアグロフォレストリーを実行するとき、問題になるものに財政的な資金、物品、道具が欠けていることがある。それらを補助したり、助成することが必要な場合がある。苗木、種子、土地資本、技術者の無料サービス、道具類の準備、食糧といったものはその中でも代表的なものである。このほかの助成には銀行からの貸しつけ、土地、収入税などの非課税や割引き、あるいは免除といったものもある。

アグロフォレストリーのプロジェクトを開始するとき、苗木の無償配付は有効で、とくに果樹などは共同体の土地で取り上げられることが多い。

共同苗畑の設置に関しては多くの農民の参加のもとで設置する。集中的に大規模な苗畑を1ヵ所設けるよりは小規模な苗畑を多数設置する方がよい。場所は交通が便利で水源のあるところを選ぶといったことを念頭にして苗畑を作る。苗木の育成にあたっては樹木の名前を記した札を立てておくとともに、苗畑を常に管理する人がいなければならない。苗

木を販売したり、配付した時は誰に何本、どの種類の木を渡したか、枯死率や成長量がどうなったかを記録できるようにしておく。

見本林や展示園についてはこれまでの技術やモデル林を設けて普及に役立てるものであるが、造成にあたっては、なるべく多くの人々を雇用し作業の習得を図る。ただ共同作業を行なうときはリーダーとなる農民を選ぶことが必要であり、その人が日頃から尊敬されていなければならない。個人の土地にモデル園を作るときは金持ちの農民は避けるべきである。何故なら、金持ちだから出来たという意識が残るからである。公開される場合は案内者または説明者を配置し、できればパンフレットもしくは説明板などを取付けておくようにする。とくにこうした場所では技術取得のための講習会や現地検討会ができるようにしておく。

講義にあたっては視聴覚教材を使うと理解がしやすい。ビデオやテープを使用すればより効果的であるが、電気のないこともあるので図や表を作っておくか黒板を利用することを考えておくとよい。

以上のほかアグロフォレストリーの意義や実践方法の普及にはマスコミのテレビやラジオを利用することもできる。